

特集「マルチ異分野の研究者からみた室内環境と環境過敏症：
科学的究明と発症予防を目指して」の企画にあたって北條祥子^{1,2)*}, 黒岩義之^{3,4)}¹⁾東北大学大学院歯学研究科 〒980-8575 宮城県仙台市青葉区青陵町4-1²⁾尚絅学院大学 〒081-1295 宮城県名取市ゆりが丘4-10-1³⁾財務省診療所 〒100-8940 東京都千代田区霞が関3-1-1⁴⁾帝京大学医学部附属溝口病院脳神経内科・脳卒中センター 〒213-8507 神奈川県川崎市高津区二子5-1-1In Planning the Special Issue "Indoor Environment and Environmental
Hypersensitivity from the Perspective of Multi-disciplinary Researchers:
Toward Scientific Investigation and Prevention of Disease Onset"Sachiko HOJO^{1,2)*} and Yoshiyuki KUROIWA^{3,4)}¹⁾Graduate School of Dentistry, Tohoku University, 4-1 Seiryomachi, Aoba-ku, Sendai-shi, Miyagi 980-8575, Japan²⁾Shokei Gakuin University, 4-10-1 Yurigaoka, Natori, Miyagi 981-1295, Japan³⁾Department of Medical Office, Ministry of Finance, 3-1-1 Kasumigaseki, Chiyoda-ku, Tokyo 100-8940, Japan⁴⁾Department of Neurology and Stroke Center, Mizonoguchi Hospital, Teikyo University School of Medicine, 5-1-1 Futago, Takatsu-ku, Kawasaki, Kanagawa 213-8507, Japan

1. はじめに

我々は日常生活の90%以上を室内で過ごしており、室内環境が健康に及ぼす影響は大きい。近年、先進国を中心に室内環境等のストレス要因によって、体調不良を起こす健康障害である環境過敏症(シックハウス症候群, 化学物質過敏症, 電磁過敏症, 慢性疲労症候群, 脳脊髄液減少症など)が注目されている。特にCOVID-19流行下では、消毒剤噴霧やテレワークなどで、化学物質や電磁場による室内環境曝露の機会が増えたため、環境過敏症患者の増加が懸念されている。また、近年では環境過敏症と小児の登校障害, 自閉症, 学習障害との関係も指摘され始めている。

未来を担う子どもを守るためにも、室内環境の整備で環境過敏症を予防することは早急に取り組むべき社会的課題であると考え。また、環境過敏症のような種々の要因が複雑に絡み合って発症すると推定される健康障害は、幅広い研究分野の研究者が情報交換・情報共有・共同研究を行いながら、科学的に究明し、発症予防対策を模索する以外ないと考える。しかし、日本では欧米諸国に比べ、環境過敏症の認知度が低く、その科学的な啓蒙が必要な段階に

ある。そこで、室内環境と環境過敏症の密接な関連性について、マルチ異分野の研究者からみた最新の知識を室内環境学会の読者と共有すべく、特集号を企画した。そして、25巻1号では、巻頭言も含めて、以下の11の原稿を掲載した。

巻頭言：北條祥子, 黒岩義之：特集にあたって (pp27-29)

- 1) 吉野博：シックハウス防止・新型コロナ対策のための換気設備点検の重要性—建築工学研究者からみた環境過敏症— (pp31-32)
- 2) 林基哉：建築物の換気不良と室内環境の実態—建築物環境衛生研究者からみた環境過敏症— (pp33-40)
- 3) 一條佑介, 野崎淳夫：環境過敏症対策としての有効な空気汚染対策製品—環境工学研究者からみた環境過敏症— (pp41-47)
- 4) 達晃一, 篠原直秀, 金勲：公共交通機関における車室内空気質と今後の展望—企業実務者らみた環境過敏症— (pp49-52)
- 5) 加藤やすこ：GIGAスクールおよび5Gの電磁波と諸学国による対策に関する最近の動向—環境

*Corresponding author (責任著者) Email: hojo@shokei.ac.jp, Tel: 022-278-0628

- ジャーナリストからみた環境過敏症— (pp53-56)
- 6) 黄琳琳, 張智元, 黃嘯谷, 北條祥子: 台湾における環境過敏症の現状と今後の展望: 台湾建築医学学会と日本の室内環境学会の国際協力を目指して—建築医学研究者からみた環境過敏症— (pp57-59)
- 7) 加藤貴彦: 公衆衛生学研究者からみた環境過敏症に関する今後の展望—公衆衛生学研究者からみた環境過敏症— (pp61-62)
- 8) 横田俊平, 黒岩義之: ストレス不耐症状を訴える登校障害児の臨床医学的検討: 若年性繊維筋痛症との類似性に注目して—小児科学研究者からみた環境過敏症— (pp63-73)
- 9) 乳井美和子, 宮田幹夫: 化学物質過敏症患者の症状緩和における食事の位置づけについて—栄養学研究者からみた環境過敏症— (pp75-83)
- 10) 浦野真弥, 太宰久美子, 加藤研太: 家庭用柔軟剤等の使用に伴う揮発性成分の挙動に関する研究 (pp85-97)

そして、本号では、以下の2つの原稿、計12の原稿を掲載して特集号は終了する。

- 11) 柳沢幸雄: 予防原則に基づく化学物質過敏の取り扱い—環境学研究者からみた環境過敏症—
- 12) 水越厚史他: 環境過敏を評価する質問票の今後の展望—疫学研究者からみた環境過敏症—

なお、環境過敏症は、アレルギー疾患や生活習慣病と同様に、現代人なら誰がいつ発症してもおかしくない健康障害であり、今後も、環境過敏症患者の急増が予測される。また、環境過敏症のような種々の要因が複雑に絡み合って発症すると推定される健康障害は、幅広い研究分野の研究者が情報交換・情報共有・共同研究を行いながら、科学的に究明し、発症予防対策を模索する以外ないと考える。そこで、環境過敏症分科会としては、特集号は終了するが、今後とも、一般投稿の形で、これからもマルチ異分野から原稿の投稿を継続する予定である。

謝辞

このような新しい企画をご承認くださり、異分野の原稿の編集や査読をしてくださった「室内環境」の多くの先生方に深く感謝します。